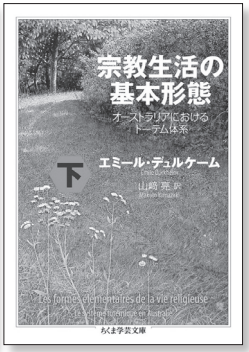
自著紹介

『宗教生活の基本形態――オーストラリアにおけるトーテム体系』上下

（ちくま学芸文庫、2014年９月）

エミール・デュルケーム 著（山﨑亮 訳）
（島根大学法文学部社会文化学科教授）



本書『宗教生活の基本形態』（以下、『基本形態』と略記する）は、フランスの社会学者デュルケーム晩年の主著 *Les formes élémentaires de la vie religieuse : le système totémique en Australie*（1912）の全訳である。本書は、オーストラリアのアボリジニ社会に見られるトーテミスムを対象とした宗教社会学の書であり、社会学のみならず、人類学や宗教学にも大きな影響を与えてきた。しかし従来、その内容が十全に理解されてきたとは、必ずしも言い難い。

本書にはすでに邦訳があったが（古野清人訳『宗教生活の原初形態』上下、岩波文庫、1975年）、これは80年以上も前の訳の改訂版であり、時代的制約もあってきわめて読みにくい。そもそも表題中のélémentairesを「原初的」と訳すこと自体が誤訳であって、トーテミスムという「原始宗教」のモノグラフとしての側面のみが強調される結果になってしまった。けれどもデュルケーム自身の意図は、トーテミスムを素材として、いわば共時的・構造論的に、すべての宗教に共通する本質、その基本的な形態を明らかにすることに向けられていたのである。

またデュルケームは一貫して宗教現象に関心を寄せていたが、彼の初期の主著である『社会分業論』（1893）や『自殺論』（1897）での視点と、『基本形態』での視点とはまったく異なっていた。近代社会のアクチュアルな問題を直接のテーマとする前２著では、「社会科学」の視点から社会的な統合や規制との関連で付随的に宗教が扱われて

いたが、『基本形態』では、「宗教とは何か」の解明がテーマとされ、人間にとって宗教がもつ意味を問う「人間科学」の視点に立っていた。認識論的カテゴリーの宗教的起源を論証する認識社会学の議論が本書に組み込まれているのも、そのためである。こうして本書は、膨大な民族誌の検討に基づいてトーテミスムの全体像を提示しながら、宗教のもつ人間的意味を論じ、さらには哲学的な認識論の問題にまで及ぶ、きわめて多岐にわたる議論を含んでいた。本書の読解が一筋縄にはいかないゆえんである。

この新訳で私は、このように多様な性格をもつ本書を、デュルケームの意図に即した形で、できるだけ忠実に現代の日本語に移し替えようと試みた。その成否は読者の判断に委ねるしかないが、ここでは、この新訳の特色について２点ばかり触れておきたい。

一つは、膨大な参照文献の書誌情報の確認作業である。実は原著で示された書誌情報はかなりいい加減であり、誤りがきわめて多い。1995年に出た新しい英訳*The Elementary Forms of Religious Life*, Free Press, 1995（translated by Karen Fields）――最初の英訳は1915年に出ている――では、この点が大幅に改善されたが、今回の新訳ではさらにそれを補充・修正することができた。これはひとえにインターネットのおかげである。欧米の図書館では文献の電子データ化が進んでおり、Internet Archiveやフランス国立図書館のGallicaなどのWebサイトを活用することで、研究者の著作はもちろんのこと、19世紀の宣教師や探検家による世界各地からの報告まで、多くの一次文献を直接確認することができた。

もう一点、実は原著では、1912年の初版、デュルケームの死後1925年に出版された第２版、さらに1960年に出た第４版（現行版）のあいだで、かなりの数に上る異同が確認される。とくに第２版では、おそらくデュルケームの甥のマルセル・モースの手になると考えられる表現上の修正がかなり見られる。また１行まるまるの脱落部分が５カ所もあり、それ以外にも多数の新たな誤植が見られる。さらに第４版で新たに生じた誤植も多い。この事実はフランスでもほとんど取り上げられたことがないが、この新訳では、版によるこれらの異同を訳註等で逐一指摘している。

最後に一言。デュルケームを知らずして社会学は語れない。そして本書を読まずしてデュルケームは分からない。社会学や宗教に関心を寄せる人には、改めてこの新訳を繙かれるよう、お薦めしたい。